

学生と地域のWIN-WIN関係をつくる 「鈴鹿学2017」の取り組み

富本真理子¹，藤岡恭子²，榎原尉津子³，高井和男⁴，前澤いすず⁵，高見啓一⁶

要旨

本稿は、学生と地域のWIN-WIN関係をつくる「鈴鹿学2017」の取り組みについてまとめ、その成果と課題について考察するものである。

現在、地域で活躍する人材の育成や大学を核とした地域産業の活性化、地方への人口集積等の観点から、地方大学が果たすべき役割には、極めて大きな期待が寄せられている。鈴鹿大学も、2015年「地域に必要とされる大学」をめざし、鈴鹿国際大学から名称変更し、「鈴鹿学」を1年生の必修科目としてスタートさせている。「鈴鹿学」は、鈴鹿市の産業や資源、地域的な特徴等について学ぶリレー形式の地域志向科目である。

成果については、①講義の総まとめとして、鈴鹿市内の地域資源をテーマに、学生による「すずかるた」の作成②地域団体との関係向上③学生にとっては、自身のキャリア形成や、地域のボランティア活動への積極的参加促進④大学教員にとっては、アクティブラーニングの実践、学部を超えた学際的な教員間の協力関係の構築、があげられた。

地域の発展、学生の発展、教員の発展、すべてに寄与できるよう進めてきたことで、三者が「WIN-WIN」の関係で学び合える、新しいアクティブラーニングのモデルを構築できたといえる。

最大の課題は、受講人数の多さ等に起因する教室内秩序の維持である。そこで、対策として「座席指定制」「巡回によるペナルティ制」などを取り入れたところ、全15回を通してゲスト講師陣からの直接的なクレームは発生しなかった。

キーワード

鈴鹿学，地域志向科目，すずかるた

1. はじめに

本稿は、学生と地域のWIN-WIN関係をつくる「鈴鹿学2017」の取り組みについてまとめ、その成果と課題について考察するものである。

1 国際人間科学部国際学科 文化政策学(Cultural policy)

2 こども教育学部こども教育学科 教育行政学 (Educational Administration)

3 こども教育学部こども教育学科 保健体育学 (Health Physical Education)

4 生活コミュニケーション学科こども学専攻 体育 (Physical Education)

5 生活コミュニケーション学科食物栄養学専攻 食生活学 (Eating habits)

6 国際人間科学部国際学科 経営学 (Business management)

鈴鹿大学は、2015年、「地域に必要とされる大学」をめざし、鈴鹿国際大学から名称変更した。地域志向の大学を目指し、特色ある授業に力を入れるため、2014年度から「鈴鹿学」を1年生の必修科目としてスタートさせている。「鈴鹿学」は、鈴鹿市の産業や資源、地域的な特徴等について学ぶり形式の地域志向科目である。

2017年度に4年目となる「鈴鹿学」は、より充実した内容を目指す気鋭の教員6名（国際人間科学部、こども教育学部（2017年4月開設）、短期大学部から各2名ずつ）が担当し、前年度末から企画を練り、実施に至った。

2017年度の履修者数は、国際人間科学部 118名、こども教育学部 19名、短期大学部 79名（こども学 35名、食物栄養学 44名）合計 216名である。なお、国際人間科学部 118名の内、日本人学生は40名前後であり、80名前後は、留学生と外国につながる学生である。

2. 「鈴鹿学」のシラバスについて

鈴鹿学のシラバスについては、以下のように設定されている。

（1）講義テーマ

鈴鹿市の地域資源を知り、その活用を主体的に考えることで地域に貢献し、自らの興味やキャリアを考える機会とする。

（2）目標

- 1 鈴鹿市の地域資源や施策に対する理解を深め、情報収集力を身に付ける。
- 2 地域資源の活用方法を考え、主体的に表現することで、提案力を身につける。
- 3 地域貢献を通じて自己のキャリアプランにフィードバックする。

（3）目的

現在の大学は、在学生のみならず、地域コミュニティの中核的存在となれるよう、機能強化が求められている（文部科学省：地（知）の拠点整備事業（大学COC事業））。「鈴鹿学」は、そのような背景から、鈴鹿大学が「地域に必要とされる大学」になるために開設された科目である。地域貢献は地域のためのみならず、情報収集や分析・提案を通じて、学生自らのキャリアプランを検討するためにも大いに役立つ。

（4）概要

講義では、観光、ビジネス、スポーツ、教育、食など、専門分野の異なる講師陣（ゲスト含む）により、鈴鹿市内にある「地域資源」に関連する話題提供を行う。受講者には、鈴鹿市の地域資源を地域貢献や自らの進路にどう生かすか、その活用のあり方について毎回、双方向型の「アクティブラーニング」で考えていただく。そして、カリキュラムの最後にまとめとして鈴鹿の地域資源をまとめた「すずかるた」を制作し、県内・全国に発信していく。斬新なアイデアや意見は歓迎する（成績に

も反映させる)。

3. 授業の実践

以下に、2017年度「鈴鹿学」の概要を表した(表1)。その詳細については、後述するが、毎回の担当教員が、自らの専門性や興味分野を中心にテーマを決め、それに応じて講師を決定し(学外講師、学内教員)、内容を詰めた。毎回、学生が、「大福帳」⁽¹⁾を記入することで、大人数の講義ながら、双方向性を持たせることを意図した。

表1 2017年度「鈴鹿学」概要：テーマと講師一覧

前期水曜日 13時～14時半 於：国際文化ホール

回	内 容
4/12 第1回	イントロダクション(カリキュラムの進め方・教員の紹介等)
4/19 第2回	鈴鹿市における多文化共生保育の取り組み 講師：本学非常勤講師 江藤 明美
4/26 第3回	伝統工芸・伊勢型紙を使ったまちづくり 講師：伊勢型紙職人 木村淳史氏
5/10 第4回	鈴鹿サーキット入門 講師：鈴鹿サーキット 斎田泰之氏
5/17 第5回	鈴鹿市の外国人施策 講師：国際交流財団 上原ジャンカルロ氏
5/24 第6回	AGF鈴鹿の取り組み 講師：AGF鈴鹿管理部中村保幸氏
5/31 第7回	AGF鈴鹿オリンピック選手支援の取り組み 講師：AGF鈴鹿所属 走り高飛びオリンピック選手 衛藤昂氏
6/7 第8回	鈴鹿市のこどもを中心とした健康づくり『ランニングバイク』の普及活動について 講師：(株)フォーティフォー下野雅司氏
6/14 第9回	鈴鹿の食(スイーツ)・農業(茶) 講師：鈴鹿市役所の川北氏/太門通商の川原氏
6/21 第10回	大黒屋光太夫の波乱の人生から学ぶ 講師：高井和男
6/28 第11回	鈴鹿大学COC・国際交流センターの活動について 講師：本学 高見啓一・前澤いすず
7/5 第12回	鈴鹿市内の公共交通 講師：伊勢鉄道&鈴鹿市都市計画課
7/12 第13回	すずかるたづくり(ワークショップ) 講師：特定非営利活動法人Mブリッジ 米山哲司氏
7/19 第14回	すずかるたづくり(作業)
7/26 第15回	すずかるたづくり(発表)

<第1回 平成29年4月12日>

- ・テーマ：Welcome to 鈴鹿学 授業のイントロダクション
- ・講師：高見啓一
- ・担当教員：高見啓一

富本 真理子, 学生と地域のWIN-WIN関係をつくる「鈴鹿学2017」の取り組み

・概要：

1. 座席の確認・クリッカーの配布 (10分)
2. クリッカーの練習 (10分)
3. 「鈴鹿学」授業の説明および注意事項 (20分)
4. 成績評価について（大福帳&すずかるた） (10分)
5. 担当教員（および担当回の内容）紹介 (10分)
6. 鈴鹿市の概要（鈴鹿市に関するクイズ） (20分)
7. 大福帳への記入（鈴鹿学を学ぶ意義） (10分)

・学生の反応：

鈴鹿学に対するイメージをクリッカーで尋ねたところ、「鈴鹿に住んでいない人には関係ない授業なのでは？」の選択肢が 51 人を占めた。特にこのような学生たちが、今後どう変化していくか注目する必要がある。

・担当者考察：

鈴鹿の地域資源を知るだけでなく、その「活用」まで主体的に考えることで、学生自身の提案力を高め、地域貢献を通じたキャリアアップにフィードバックすることを強調した。特に就職活動や奨学金・補助金といったキーワードをあえて多用したり、クリッカーを用いたクイズを交えることにより、学生自身のモチベーションが上がるよう心掛けた。

・参考文献：村瀬慶紀講師作成資料（2016年鈴鹿学担当）

鈴鹿市総合政策課作成資料（2016年鈴鹿学講義）



写真：クリッカーを使った授業の様子

<第2回 平成29年4月19日>

・テーマ：鈴鹿市における多文化共生保育の取り組み

・講師：江藤明美（鈴鹿大学短期大学部非常勤講師）

・担当教員：藤岡恭子（鈴鹿大学こども教育学部）

・概要：江藤先生は、鈴鹿市で保育士・園長を務め



写真：多文化共生の話に興味津々

あげ定年退職後、本学短期大学部専任教員として（～平成29年3月本学定年退職）、引き続き非常勤講師として、保育士養成・実習指導にご尽力されている。江藤先生の講演におけるキーワードは、「多文化共生」、「途切れのない支援」、「外国人コーディネーター」である。①江藤先生が、鈴鹿市の多文化共生保育事業立ち上げからかかわり、数々の条件整備をされてきた経緯が紹介された。②本学短大卒業生で、公務員試験（鈴鹿市立保育所）に合格し、保育士として活躍中のAさん（両親はブラジル人、永住権を獲得）の様子が語られた。③鈴鹿市任用の「外国人コーディネーター」N氏（ペルー人）からの聴き取りから、「子どもは保育所で日本語を覚えてくるが、両親は日本語がわからない」「ことばのみでなく文化や生活習慣が違う」「日本の文化になじむのがむつかしい」などの具体例が紹介された。また、江藤先生の実践経験を踏まえて、「外国籍の子どもが自信をもって母語でも話し、母国のことを語れるように」、「周りの子が、その子どもの母国の素晴らしさに気づけるように」保育者が働きかける必要性、さらに「自らのアイデンティティとして根づかせるべき自国を誇りに思い…文化の融合を図りながら自己を作り出す道筋を、周りの大人たちが支援する必要性」に言及された。

・学生の反応：江藤先生の講演後、「次世代の子どもに多国籍の人と生活することの良さをどのように伝えたり示したりしていきたいですか」という質問（記述式）を行った。以下、外国籍の学生からの回答を数件紹介する。「自分の体験談を話し、興味を持ってもらう」「自分自身が海外で生活しさまざまな国籍の方々と関わってきて経験してきたことを話しそれを子どもたちに伝えていきたい」「外国の方を招いて日本に来て困ったり、驚いたりしたことを話してもらおう」「私は〇〇人で、日本に来てから、文化や言語の違いに苦しめることとなったので、次世代の子どもたちに同じ思いしないように、できたら、もっと多国籍の子とふれあう機会を増してほしいと思います」「外国人コーディネーターを増やしていけるようにしたい」。「外国の文化や昔話」や「外国のダンスや歌」を教えるなど。

・担当者考察：江藤先生の講演内容に即して、「過去の経験（事実確認）」～「経験の省察」～「経験の再構成」を構想した「多文化共生保育に関する質問紙」を実施した。特に、外国籍で日本育ちの人の「経験の意味」を「省察」する機会になったようである。「鈴鹿学」の授業全体が、「多文化共生」という課題に対して「自分はどのような生き方を選びとるか」を問うている。「自分がこの大学で知り合った多国籍の人々の話を次世代の子どもたちに伝えていく」（日本人学生の回答）ことにヒントがあると思う。

<第3回 平成29年4月26日>

- ・テーマ：伝統工芸とまちづくり
- ・講師：木村淳史氏

1990年生まれ。三重県鈴鹿市出身、伊勢型紙職人。映像制作、HP制作なども手掛ける。2016年10月に「修行型ゲストハウス」を考案。11月に白子のリノベーション団体「Blanc-co」が改装していた古民家での開業が決定。その後、白子寺家地区1200軒ほどに呼びかけ、伊勢型紙の道具を集め行い、現在は宿泊許可申請のための改装を実施中。

- ・担当教員：富本真理子
- ・概要：

①伊勢型紙についての質問（クリッカー作動せず残念）

②木村氏講演

木村氏は、伊勢型紙の産地、白子に『職人が作業する』風景を残したいと、修行型ゲストハウス「テラコヤ伊勢型紙」をオープン。それは、白子地区に残る築70年以上の古民家を「テラコヤ伊勢型紙」として、地域の人々の協力を得てリノベーションしたものである。さらに、クラウドファンディングという、新しい仕組みで、資金を調達したことを説明。

③木村氏語録「好きなことは、今すぐやる／自分で稼ぐ／組織ではなく、個人の時代」

- ・学生の反応：「鈴鹿学がはじまると、地元の知らないことが多くわかってうれしい」「あつしさんは、とても面白い人で、とてもわかりやすかった。」「自分は、失敗がすごく怖い。でも、あつしさんの話をきいて失敗しても大丈夫だと思った。」「木村さんの話をきいて人生っていろいろあるけれど、挑戦することが大事だと思った。」「着物を着ている人たちが、本当に印象的。鈴鹿学最高～。」
- ・担当者考察：伝統工芸という分野で、クラウドファンディング、ウェブ、ゲストハウスという新しいコンテンツをうまく組み合わせてのまちづくり活動が非常に興味深い。地元の伝統工芸について学生が興味を持ってくれればうれしい。また、木村氏自身の持つ魅力や情熱、多くの人を巻き込んでの起業は、学生の良いモデルになったと思う。



写真：着物姿の木村氏（右）と
担当教員（左）



写真：講師、受講生と記念撮影

<第4回平成29年5月10日>

- ・テーマ：「鈴鹿サーキット入門」
- ・講師：株式会社モビリティランド 鈴鹿サーキット 事業推進室総務課 齋田 泰之氏
- ・担当教員：富本真理子
- ・概要：

★鈴鹿サーキットの歴史と事業内容について

- ・創業者の思い：本田宗一郎：レースは実験室→レーシングコース創設へ
藤澤武雄：自分で操縦する楽しみを味わえる自動車遊園地→モートピア創設
- ・目指すもの『モータースポーツのトップブランド』の価値・評価を向上させ、世界トップレベルかつ他に類を見ない“モビリティテーマパーク”

★鈴鹿サーキットの4事業

- ・モータースポーツ：F1日本グランプリ、8時間耐久などレースイベントを開催。
- ・モートピア：「あやつる喜びを」がコンセプト
- ・ホテル・レストラン
- ・交通教育（鈴鹿サーキット交通教育センター（STEC））

★鈴鹿大学学生へ課題提案

鈴鹿サーキットの将来

～2050年の鈴鹿サーキットは？～

リアリティの追求か、バーチャルへの転換か

- ・学生の反応：鈴鹿サーキットからの課題への回答（一部）

中高生向けレース体験／VRと乗り物をくっつける／バックトゥザフューチャーのように空を飛ぶ車／鈴鹿サーキットはエンジン音がいいと思う。電気自動車にもこの音を付けるべき／モノづくりは日本の原点。本田宗一郎の意思を継ぐ場。身体が不自由な人も楽しめる。／ロボットが動かせる。ロボットがスタッフ。／博物館。日本のモータースポーツの聖地に／エコにこだわった遊園地

・担当者考察：鈴鹿サーキットは、鈴鹿市の代表的地域資源である。本田宗一郎の自動車生産における技術面の向上、藤澤武雄のモータースポーツ文化の創造といった創業者たちの思いが詰まっている場所である。創業者の思いと鈴鹿サーキットの4事業部門の紹介をしていただいた。モビリティランドは、特に乳幼児でも楽しめることで他の遊園地と差別化しており、学生たちからは、総じて共感が得られないようで、2050年の鈴鹿サーキットでは、絶叫系の乗り物を望む声もあった。また、リアリティとバーチャル混合派が多いようであるが、意外にリアリティ派が多かった。バーチャルな社会になりつつあるからこそ、リアリティのよさを感じているのか。鈴鹿サーキットを通じて2050年のエンターテインメントを考えるよい機会を得たと感じられた。



写真：鈴鹿サーキットの未来は
どうなるか？

<第5回 平成29年5月17日>

- ・テーマ：鈴鹿市内の外国人の状況 さまざまな施策について
- ・講師：公益財団法人三重県国際交流財団 専門員 上原ジャンカルロ様
- ・担当教員：高見啓一

・概要：

1. クリッカーの配布・緒連絡 (5分)
2. クリッカークイズ&アンケート (20分)
3. 鈴鹿市内の外国人の状況・施策について (50分)
4. 学生による議論（外国人との共生のために） (10分)
5. 大福帳への記入（自らがすべきことは何か） (5分)

・学生の反応：

外国人に関するクリッカークイズは、第2回の学習成果もあってか、半数以上の学生が正解していた。国籍の違う友達の存在や、外国人によるイベントやお店への興味についても、半数以上の学生が「1人以上いる」「行ったことがある」「興味がある」と回答しており、本学の学生の多文化共生への興味が伺えた。

講義の後の大福帳からも、「外国人に日本語を教えてあげたい」という意見が多かった。外国籍の学生で子どもの頃から日本に住む女子学生の一人は、「昔の自分を思い出して泣きそうになった」と強く感銘を受けていた。

・担当者考察：

多文化共生に強い興味を持つ学生が何名かみられ、毎回終了後にゲスト講師のもとへ行き、積極的に質問し、名刺をもらいに行く姿は非常に評価ができる。

一方で、5回目となり居眠りやスマートフォンの操作も目立つようになってきた。教室内の秩序維持に教員が動き回らざるを得ない状況となっている（教員自身が落ち着いて聞けないのが辛い点である）。



写真：クリッカークイズに挑戦をして学びを深めています



写真：講師の上原ジャンカルロ氏

<第6回 平成29年5月23日>

- ・テーマ：AGF 鈴鹿の地域貢献活動
- ・講師：AGF 鈴鹿株式会社 中村保幸氏
- ・担当教員：富本真理子
- ・概要：

1. コーヒーについて
2. AGF 鈴鹿の概要について
3. 地域貢献活動：工場見学、コーヒー／環境教室、イベント協賛、鈴鹿茶の製品化
4. ネーミングライツについて：AGF 鈴鹿陸上競技場、AGF 鈴鹿体育館
5. 質疑応答から

中村様が AGF に入社された経緯

食品会社として、品質管理には気を付けている。

会社として求める人材

あきらめないで、何度でも挑戦する。

人のせいにはしない。自分のできることを考える。

辛かったことをどのように乗り越えるか対処法を持っている。

- ・学生の反応：
 - ・コーヒーに関する知識（植物、輸入、消費量など）がよくわかった。
 - ・AGF 鈴鹿の地域貢献活動について非常に興味を持ち、自分の就職先もその分野に力をいれている会社にしたかったというコメントがあった。
 - ・学生採用の基準について述べられたことが、非常に参考になったというコメントが多数。
 - ・一方で、企業の地域貢献活動についてよく理解できないとの記述があった。

- ・担当者考察：

ブレンドなどを製造している会社で、しかも鈴鹿にあるので興味深く話が聞けたようである。講師の方からも、しっかり聞いていたと、コメントをくださった。

会社は、経済活動のみならず、地域貢献に力を入れている点については、特に留学生を中心によくわからないというコメントが少しあった。一方、日本人学生は、その点を非常に評価し、就職先を選ぶ基準にしたいというコメントも見受けられた。専門科目でのフォローが必要であると考え。

今回は、国際人間科学部で欠席が目立った。



写真：コーヒー以外の活動を学びました



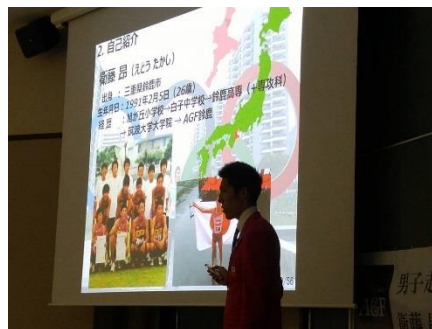
写真：AGF の地域貢献活動について

<第7回 平成29年5月30日>

- ・テーマ：AGF 鈴鹿の地域貢献活動
- ・講師：AGF 鈴鹿 衛藤 昂（えとう たかし）氏
 リオデジャネイロ五輪 走り高跳び 日本代表
- ・担当教員：富本真理子
- ・概要：
 1. 走り高跳びクイズ（アイスブレイク）
 2. 自己紹介（経歴、跳躍映像）
 3. オリンピックまでの道のり（記録の変遷、選考基準）
 4. 仕事と競技の両立（勤務、生活リズム、練習時間）
 5. 高く跳べると（メリット、デメリット）
＝社会人で競技を行うことで有利な点、不利な点
 6. 周囲（会社、地域）から求められること、求めること
 7. 引退後のキャリア（今考えていること）
 - ・地元での温かい応援がありがたい。
 - ・地道に努力することが大事。
 - ・「自分の一番を探す」、自分の個性を最大限生かされる人生を歩みたい。
- ・学生の反応：
 - ・じぶんたちの身近にこんなにすごい選手がいるとは知らなかった。
 - ・夢にむかって努力する姿はすばらしい。
 - ・仕事と両立しながら競技生活をしていることを尊敬する。
 - ・今、アスリートとして活躍されていても、引退後のこともしっかり考えている。
- ・担当者考察：
 - ・2m30cm を跳ぶこと、オリンピックに出場するという事実だけで、単純に感動する。
さらに、26歳の人生の中身が非常に凝縮されており、その中でも自分を見失わずに日々精進されている姿が印象的であった。
 - ・学生たちも、身近にいるヒーローから何かを感じ取ったであろう。
 - ・なお、この講義は、伊勢新聞、読売新聞、中日新聞で掲載された。



写真：オリンピック選手の衛藤氏



写真：衛藤氏の跳躍力に驚き！

富本 真理子，学生と地域のWIN-WIN関係をつくる「鈴鹿学2017」の取り組み

<第8回 平成29年6月7日>

・テーマ：

鈴鹿市のこどもを中心とした健康づくり「ランニングバイク」の普及活動について

・講師：(株)フォーティフォー WEBプランナー 下野雅司氏

トライアル国際A級ライダー TEAM MITANI 所属 氏川湧雅氏

・担当教員：榊原尉津子

・概要：1.講師紹介 2.「ランニングバイク」の普及活動について 3.デモンストレーション（実演） 4.ランニングバイクの普及活動に関するアンケート調査 5.大福帳への記入。



写真：講師の下野氏

本学子育てイノベーションセンター事業の一つであるランニングバイクの普及活動報告とセンター所属教員との研究活動について

紹介された。また、平成29年4月27日には、鈴鹿市のこどもを中心とした健康づくり『ランニングバイク』の普及活動を報告するため、末松のりこ鈴鹿市長を表敬訪問したこと、鈴鹿市内保育所（園）での体験会の取り組みについて紹介された。授業後半は、氏川プロによるバイクのデモンストレーションとサドルの無い競技用バイクに学生が試乗し、足を着けずにバランスを保つ難しさを体験した。講演当日は、本学のキャンパスツアーに参加していた県内の高校生35名も授業に参加し、他大学には無い地域志向科目「鈴鹿学」の魅力を体験した。

・学生の反応（アンケート調査から）：【どのように普及活動をすればよいか】を尋ねると、「もっとイベントを開いて、体験できる機会を持つと、興味ない人が興味を持つようになる」「ランニングバイクをアニメ化すると多くの人に知ってもらえる」「学校を訪問して、知ってもらおう」というアイデアが寄せられた。【ボランティアスタッフとして参加したいか】については、学部・学科を超えて8名の学生が積極的に参加したいと回答していた。

・担当者考察：鈴鹿市で活躍されているモータースポーツの専門家2名を講師に招いた。残念ながら、講演当日は雨天となってしまう縮小版デモンストレーションとなったが、予想以上に大学生、高校生の反応がよく、試乗会の場面では積極的に舞台に上がる姿が見られた。また、アンケートへは、普及活動のためボランティアスタッフとして参加したいという学生が学部、学科に関係なくいたことに学生の積極性を感じた。受講生の中には、日本語が十分に理解できていない学生が含まれるため、スライドや動画の視聴覚教材を取り入れた授業を実施することで、講義内容をより深く理解できることを改めて感じた。



写真：氏川氏による
デモンストレーション



写真：バイクに挑戦する学生

<第9回 平成29年6月14日>

・テーマ：鈴鹿の食(スイーツ)と農業(お茶)

・講師：鈴鹿市役所地域資源活用課 川北 彩夏 氏

(鈴鹿抹茶ブランド化研究会事務局) 太門通商株式会社 食品事業部部長 川原 一夫 氏

・担当教員：前澤いすず

・概要：

□クリッカー、今日のテーマに関する質問 (10分)

□講師のお話 (60分)

「鈴鹿の食と農業について」鈴鹿市 川北 彩夏 氏

「鈴鹿抹茶のブランド振興について」太門通商株式会社 川原 一夫 氏

□課題「鈴鹿抹茶」または「かぶせ茶」を使った新しい商品の企画を考える (20分)

鈴鹿の地域資源である「かぶせ茶」と「鈴鹿抹茶」をPRする取り組みについて、鈴鹿市と企業の立場からそれぞれお話を伺った。

鈴鹿市役所の川北氏からは、鈴鹿の地域資源を活用した新商品開発、販路開拓を行う事業に対して交付する補助金【メイド・インSUZUKA 応援補助金】、茶葉の手摘みをするお茶の応援隊【すずか茶ポーター】などの取り組みについてお話があった。

太門通商株式会社の川原氏からは、鈴鹿抹茶ブランド化研究会の鈴鹿のお茶拡販に向けた取り組みについて、また「かぶせ茶」や「鈴鹿抹茶」のおいしさについて科学的な面からも詳しくお話いただいた。鈴鹿抹茶ブランド化研究会が作成した【鈴鹿のお茶グルメマップ】も配布され、鈴鹿市内外の和・洋菓子店や飲食店で鈴鹿抹茶を使ったスイーツや料理が展開されていることも紹介いただいた。

・学生の反応：クリッカーを用いた質問の回答状況は、鈴鹿抹茶の認知度 32.5%、かぶせ茶の認知度 24.7%、鈴鹿抹茶の商品認知度 26.6%、急須を使う回数「ほとんど使わない」「家に急須がない」をあわせて 76.1%であった。課題である新商品企画のアイデアとして様々な提案がなされた。珍しいアイデアとして次のようなものがあった。[国際人間科学部]入浴剤、歯磨き粉、抹茶色の伊勢型紙、鈴鹿茶漬け、かぶせ茶のホドゥグアジャ[こども教育学部]鈴鹿茶葉の天ぷら、かぶせ茶フラペチーノ[食物栄養学専攻]茶一シュー、抹茶粥、鈴鹿抹茶のポップコーン、かぶせ茶マシュマロ、かぶせ茶佃煮[こども学専攻]かぶせ茶ラテ、抹茶アイスのクッキーサンド、鈴鹿抹茶石鹸、香り袋。

・担当者考察 (コメント)：鈴鹿抹茶の認知度 32.5%、かぶせ茶の認知度 24.7%は、考えていたよりも低い結果であった。すばらしい地域資源なので、もっとたくさんの人たちに知ってもらいたいと思う。学生から寄せられた色々なアイデアが鈴鹿抹茶の認知度を上げるきっかけになってくれたらうれしく思う。

<第10回 平成29年6月21日>

- ・テーマ：大黒屋光太夫の波乱の人生
- ・講師、担当教員：高井和男
- ・概要：



写真：大黒屋光太夫の冒険

1. 旅から学ぶ

講師の旅の体験をもとに旅から何を学ぶかを考える。

2. 大黒屋光太夫の波乱の人生

鈴鹿出身の船頭、大黒屋光太夫の波乱の人生を、オホーツク海漂流～ロシア横断～日本帰還の順で辿り、その10年のプロセスを、「4つの出会い」と「3つの選択」というキーワードをもとに解説した。

3. 海外進出と海外貢献

若い世代から海外進出と海外貢献できる方法として、ワーキングホリデー、青年海外協力隊、海外日本人学校等について解説した。

4. 事後ワーク

大福帳への記入と感想文

・学生の反応：

大黒屋光太夫の壮大な冒険を1つの旅と捉え、講師の学生時代の旅の体験談から話をスタートしたが、「旅」といういつも以上に身近なテーマであるせいか、興味をもって、授業を聞いてくれた気がする。光太夫については、「こんなすごい人が鈴鹿にいたなんて知らなかった。」「光太夫の小説や映画をぜひ見てみたい。」等の感想から、郷土のヒーローを広く学生に知ってもらえることができたように思う。ただ、留学生には歴史的背景などが難しく、ちゃんと内容を理解してもらえたかは、疑問である。また、旅については「学生時代に日本一周してみたい。」「いろいろな国に興味を持った。」「先生が暮らしたニュージーランドに行きたい。」等の感想が多く、学生たちが、自身の旅への具体的なイメージをつかんでくれたのなら、うれしい限りである。

・担当者考察：

運命のいたずらによって、次々とふりかかる困難と挫折に、郷土のヒーローが、その場その場でどのように対処したかを伝えたかった。よって単なる年表の解説ではなく、出会いと選択をキーワードに物語風に語りかけることに心掛けた。セカンドテーマである旅については、教科書には書いていない、教室では教えられない体験と教訓を、旅から学べることを伝えたかった。また、留学生にとっては日本へのさらなる関心を、日本人学生にとっては日本各地、さらには海外への関心が高まるきっかけになったのなら幸いである。そして、現代のインドア派の多い学生に対しては、旅を通して、広い世界観を身につけ、三重県や鈴鹿の魅力を再発見するスケールの大きな価値観を持ってほしいと願ってやまない。

<第11回 平成29年6月28日>

- ・テーマ：鈴鹿大学・鈴鹿大学短期大学部 COC・国際交流センターの活動について
- ・講師：鈴鹿大学 COC・国際交流センター長 高見啓一
鈴鹿大学短期大学部 COC・国際交流センター長 前澤いすず
- ・担当教員：高見啓一・前澤いすず

・概要：

1. 諸連絡（コンソーシアムみえアンケートの説明） （10分）
2. 導入ワーク「ボランティアを就活に活かそう」 （40分）
3. COC・国際交流センターの活動紹介・ボランティア募集 （30分）
4. 事後ワーク「やってみたい活動をリストアップ」 （5分）
5. 大福帳への記入・大学祭実行委員会からのお知らせ （5分）

・学生の反応：

「教員の昔の写真を交えての経験談が面白かった」との声が多数あった。「先生について知れてよかった」「先生の話が参考になった」との声もあった。

「今の自分について考えさせられた」「早く進路を決めたい」という前向きな意見も多く見られた。「模倣困難性」のキーワードが印象に残っている学生も見られた。

・担当者考察：

学生を飽きさせないように、教員の写真や体験談を交えての実施としたが、全体的に態度もよく大半の学生はしっかりと聞いているようであった。また、最も重要な学生自身のモチベーションアップにもつながったようで、何よりであった。

COCセンターの理念や意義については若干難しいように感じたようだが、総じてボランティアには関心が高いことが伺えた。ボランティアのイメージについて「楽しみながら将来に役立ちそう」と書いている学生もあり、今回のように学生のメリットを強調することは重要であると思われる。学生の反応を、今後のセンター事業に役立てていきたい。



写真：ボランティアの説明



写真：担当教員の学生時代は？

<第12回 平成29年7月5日>

- ・テーマ：鈴鹿市内の公共交通（伊勢鉄道&C-BUS） 地域交通の活性化策を考えよう
- ・講師：伊勢鉄道株式会社 総務部経理課 富澤康茂氏
鈴鹿市都市計画課 総務・交通政策 G 伊藤保敬氏・渡邊賢氏・松田一真氏
- ・担当教員：高見啓一

・概要：

1. 学生実態調査 市内公共交通の利用状況（クリッカー集計） (15分)
2. 伊勢鉄道による講演 (25分)
3. 事後ワーク① 伊勢鉄道の活性化策を検討 (10分)
4. 鈴鹿市都市計画課による講演 (25分)
5. 事後ワーク② C-BUSの活性化策を検討 (10分)
6. 大福帳への記入とまとめ（高見） (5分)

・学生の反応：

伊勢鉄道富澤さまによる起立をさせてのクイズが、学生も盛り上がっていた。C-BUSについてはイオンモール鈴鹿に1本で行けるという点を強調してもらった点が、学生にとっても関心が高かったようだ。「これから乗るようにしたい」という意見も多かった。

事後ワークでは、学生への広報手段について様々なアイデアが寄せられた。事前に論点を「学生」や「子ども」に絞ったワークにしたことで、学生たちも考えやすかったようだ。

・担当者考察：

冒頭、企画運営部会議による授業参観が行われた。今回の講義は鈴鹿市との学官連携協議における本学からの提案事項にも関連する内容であるため、鈴鹿市および伊勢鉄道へのアピールという意味でも意義深かったのではないかとと思われる。

また、最後のまとめでは学生に若干刺激を与える意味で、学バスの有料化について言及した。本学の財政難と学バスの問題は関連しており、学生たちには「自分たちの問題」として公共交通について考えるきっかけとさせたい。



写真：学生の通学方法は？



写真：伊勢鉄道の魅了満載の講演でした



写真：発見！
とっても便利なC-BUS

<第13回 平成29年7月12日>

- ・テーマ：すずかるたづくり（ワークショップ）

～地域資源をかるたにする手法についての学習～

- ・講師：特定非営利活動法人 Mブリッジ 米山 哲司氏
- ・担当教員：富本 真理子

- ・概要：

1. すずかるたづくりの説明
2. 自分の身の回りの出来事の抽出
3. アイデアとは：「関係性の発見」
4. これまでの鈴鹿学の内容を振り返ってのアイデア出し
5. アイデアを読み札に落とし込む
6. 読み札の作成

- ・学生の反応：

周りとは相談しながら、自分の生活の中から読み札をつくる練習に、盛り上がっていた。これまでの「鈴鹿学」の内容の振り返りについては、話がはずんでいたが、いざ読み札形式に絞り込むことに苦勞する学生が多かった。

- ・担当者考察：

「かるた」という日本の文化について知識のない留学生のために、前回終了後に「かるた」を使用して遊ぶ機会をつくり、理解を深める努力をした。

ワークショップの方法が、やや高度であったため、指示についていけなかった学生（日本人も含めて）が多かったかもしれない。

しかし、何とか、かるたにするという作業の方向性がみえてきたため、次回の作業に繋げていくことができそうだという手応えがあった。



写真：米山 哲司氏



写真：かるたづくりのノウハウは？

富本 真理子，学生と地域のWIN-WIN関係をつくる「鈴鹿学2017」の取り組み

<第14回 平成29年7月19日>

- ・テーマ：すずかるたづくり（作業、紹介）

～鈴鹿の地域資源をまとめた「すずかるた」の制作～

<第15回 平成29年7月19日>

- ・テーマ：すずかるたづくり（鑑賞・投票・表彰）

- ・担当教員：富本 真理子

- ・概要：

2回にわたり、「すずかるた」の制作、鑑賞、投票、優秀作品の表彰を実施した。

- ・学生の反応：

作品の紹介では、個性が光るもの、独創的で面白いもの等、力作揃いで歓声があがった。特にイラストの上手なものの評価が高い感じがした。作品とともに、一連の鈴鹿学の講義が思い出され楽しそうであった。

200数名分のかるたを鑑賞しているときは、本当に楽しそうであり、他人との発想の違いも新鮮であったという感想を聞いた。留学生も語彙が少ないながらも、独特の感性で表現したことへの健闘を称える声があった。

- ・担当者考察：

15回の授業が終わり、学部の違う教員同士の協力のもと、すずかるたの完成と凝縮された時間を過ごすことができたことに感謝したい。学生にとっても、教員にとっても、鈴鹿市の地域資源をより深く知ることができるとともに、協力くださった地域の方との交流は、地域に育てていただいていることを実感した。

本日は、市民の方の参観もあり、学外からも興味を持たれていることを感じた。

4. まとめ ～鈴鹿学の成果と課題～



写真：すずかるたづくりに熱中する学生たち



写真：優秀作品表彰

(1) すずかるたの製作

講義の総まとめとして、鈴鹿市内の地域資源をテーマに、学生が1人1セット（絵札&読み札）「すずかるた」を作成した（資料参照）。第1回から学んできた内容をイメージし、5・7・5調で読み札を作成し、イラストを描かせた。

これまでの14回で、出席コメントカード「大福帳」に毎回イラストを描かせた結果、絵の得意不得意に関係なく、各自抵抗なくイラストが描けていたようだ。また、日本の俳句の5・7・5調に留学生も興味津々であった。

学生による投票を行った結果、優秀賞は短期大学部の3名が選ばれた。イラストの上手さが際立っていて、聴講する学生たちの反応もよかった。講義内容を振り返るカルタの制作、学生目線での投票、そして今後予定している地域へのお披露目など、アクティブラーニングの要素が詰まった取り組みであると言えるだろう。

(2) 地域にとってのメリット

鈴鹿学の成果として、まず何よりも重要なことは「地域団体との関係向上」であろう。本講義では、地域のゲスト講師による話題提供のみならず、地域の取り組みに対して学生からのニーズ発信、アイデア提案といった「学生側からの発信」を毎回入れ込んだことで、ゲスト講師が「お土産」として持ち帰れるような双方向での情報交流ができた。

一例として、伊勢鉄道および鈴鹿市都市計画課（C-BUS 担当部局）をゲストにお招きした第12回「鈴鹿市内の公共交通」がある。この回では冒頭に、市内公共交通の利用状況・周知状況をクリッカーで調査したほか、これらの交通機関の活性化に向けてのアイデア提出まで行った。その後2017年大学祭での、交通PRブース出展企画にもつながっている。これらの取り組みについては「学官連携協議」の場において、末松則子鈴鹿市長からも絶賛をいただき、今後も市と本学が連携して地域交通の活性化に取り組むこととなった。

ほかにも、鈴鹿市役所地域資源課と太門通商株式会社をゲストにお招きしての第9回「鈴鹿の食(スイーツ)と農業(お茶)」でも、学生に新しい鈴鹿抹茶スイーツの案を考えさせ、ゲストにお持ち帰りいただいたところ「よいアイデアは商品化に向けて進めたい」との意見をいただくことができた。

地域のゲストにとっても参考になる意見が多く、全学部1年次必修ということによる人数の多さが、これらの点では功を奏しているといえよう。

(3) 学生にとってのメリット

本講義の目的に置いていたのが「学生自身のキャリア形成」である。地域関係科目はともすれば「地元に住んでいないから興味がない」「将来は別の町で就職するので関係ない」と、学生から冷ややかな目で見られがちである。この点を払拭できるよう鈴鹿学では、「地域資源の活用」という視点から自らのキャリア形成について考えるよう指導した。

一例として、本学 COC・国際交流センターの2名のセンター長による第11回「鈴鹿大学・鈴鹿大学短期大学部 COC・国際センターの活動について」がある。この講義では、COCセンターがコーディネートしている地域活動や学生ボランティアの取り組みなどを紹介し、学生自身の奨学金獲得や就職活動につながっていることを学生に説明した。また、学生にとって最も身近な講義担当教員6名の学生時代のキャリア形成についても紹介することで、学内外での各種活動に積極的に参加することの意義を伝えることができた。

成果は確実に上がっている。ボランティア募集等があった際には、必ず鈴鹿学場で呼びかけるようにしたところ、数は少ないが毎回何名かの学生が積極的に応募してくれるようになった（例として、幼稚園・保育所でのランニングバイク体験会には留学生もボランティア参加し、普及活動に協力している）。また、2017年大学祭の実行委員にも鈴鹿学受講生から7名の学生が自主的に応募しており、熱心に活動している。留学生も、鈴鹿学での学びから地域の活動に積極的に関与しようという態度が見られるようになった。

（4）大学・教員にとってのメリット

上記（2）（3）に述べたことがそのまま大学・短大の教学の質向上であり、ひいては教員にとってのメリットでもある。これに加えて指導教員間にもいくつかのメリットが生まれた。まずは、アクティブラーニングの方法が広げられたことだろう。クリッカーや書画カメラなど最新鋭のツールを積極的に用いた講義は、今後他の講義にも活用できるノウハウとなった。そしてアクティブラーニングを通じて、積極的な学生を発見・育成することができ、ボランティア人材の活用につながっている。

一番大きな収穫は、学部を超えた学際的な協力関係を教員同士が持てたことであろう。鈴鹿学終了後、全員の出席は叶わなかったが、担当教員が交流する食事会を持つことができた（大学祭チームと合同にて）。観光・ビジネス・こども・教育・食物栄養といった幅広い分野の教員がいる本学ならではの、新しい取り組みの創出も期待できるのではないかな。

（5）まとめ ～鈴鹿学の成果と今後の課題～

上述のとおり、地域の発展、学生の発展、教員の発展、すべてに寄与できるよう進めてきたことで、三者が「WIN-WIN」の関係で学び合える、新しいアクティブラーニングのモデルを構築できたといえる。鈴鹿学のような地域志向科目に限らず、学生や地域との「WIN-WIN」の関係を構築できているかどうかという視点からの授業評価を行うことも、今後の高等教育機関の運営において有効であるものと思われる。

ただし鈴鹿学講義自体には残された課題がある。最大の課題は、受講人数の多さ等に起因する教室内秩序の維持である。学生の受講態度の劣化傾向（居眠り・私語・スマートフォン等）については、去年度の教員からも引き継いだところであり、地域志向科目の場合

はゲスト講師（地域）と大学との関係を悪化させることのないよう、通常講義以上に十分な配慮が必要である。そこで、対策として「座席指定制」「巡回によるペナルティ制」などを取り入れたところ、全15回を通してゲスト講師陣からの直接的なクレームは発生しなかった。

しかし、受講態度については依然として問題があり、「途中退室」「飲食」といったものも含めた学部を超えての学内ルールの統一化や、さらなるペナルティの強化（受講禁止措置等）も検討していく必要があるだろう。

注

(1)「大福帳」とは、授業で利用し、学生との交流、授業の改善につとめる目的で、織田揮準（三重大学名誉教授、2003年3月まで教育学部教授、現皇學館大学教授）が1988年頃に考案・作成した授業用カードである。須曾野仁志「授業交流カード『大福帳』の教育効果」三重大学高等教育創造開発センター（HEDC）第2回大学教育カフェ資料、2006年。

資料:「すずかるた」学生作品(抜粋)



サーキット
世界があつまれ
F1レース



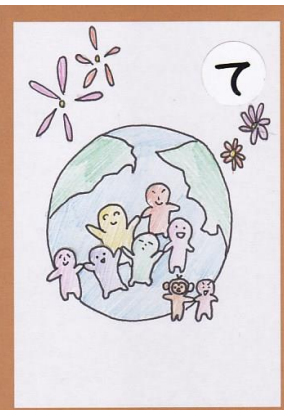
かみ一枚
職人の手により
一枚の絵



メーテルが
いるなら
伊勢鉄道
乗りたい



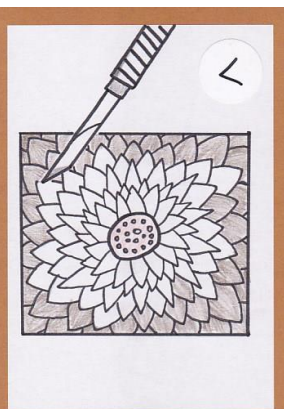
わくわくを
探しにいこう
C-BUSで



てをつなぎ、
日本をとびだし
ひろがろう



おもしろい
ランニングバイク
かっこいい



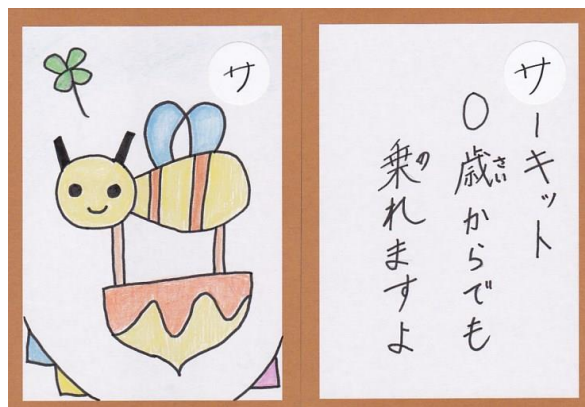
くろうする
伊勢型紙の
その技術



すずがしは
しずがなところ
きれいです。



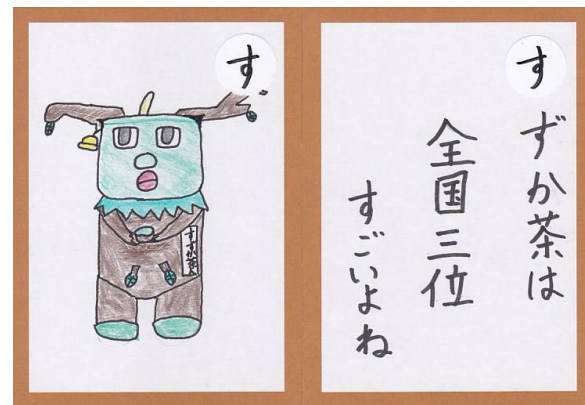
し
 しろこから
 ロシアに漂流
 光太夫



サ
 サーキット
 0歳からでも
 乗れますよ



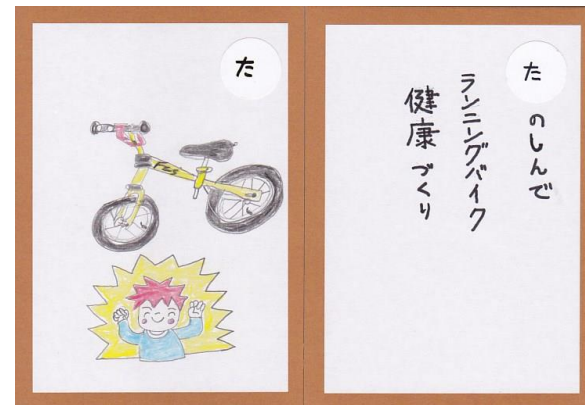
て
 てんとうせ
 伊勢型紙
 鈴鹿
 オウ



す
 すずか茶は
 全国三位
 すごいよね



や
 やさしい
 日本語は
 外国人に



た
 たしんで
 ランニングバイク
 健康づくり



せ
 せかいの輪
 広がる仲間
 鈴鹿市で



こ
 こくさいか
 こことはちがうが
 友はいる

Activities of “Suzukagaku 2017 ” : Creating a Win-Win Relationship between Students and Community

Mariko TOMIMOTO, Yasuko FUJIOKA, Itsuko SAKAKIBARA, Kazuo TAKAI
Isuzu MAEZAWA, Keiichi TAKAMI

